武江年表

839
8
62

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用

武江年表巻之三

延宝元年　癸丑

根岸信輔氏寄贈

昭和八・九・四 寄贈

九月廿一日改元

斗酒弘福寺宴剣（客山談半禅師あり）翌年正月廿日迄

菖蒲咲始○九月十七日浚茂九代将軍

○十月廿二日連昌院雲村玄祥寂

山恵福予命じぬ○十一月芝金地院立山十刹諸

○十一月廿日庁桐石神養率（六十九才号字関石坪流茶祖）

○勅二条帝芝居ゟ（もより）大名顕（たづね）に天王推参（おしかけ）を上ゟ（より）厳狂言を奥行（おこなう）、元祖時十両

初舞台（ぶたい）を踏（ふみ）始て荒事（あらごと）をなす

同二年　甲寅

二月浅草大円寺十王堂再建○二月廿六日夜快晴にて戌の方の黒雲東より西へ棚引空中に橋を渡せるが如し

○八月西久保八幡宮の門前の鐘楼并切通しへ引移し并松平古兵衛寄附して鐘を鋳る○千羽鶴新白金瑞聖寺に経蔵を建立蔵典は黄檗一万余巻を収む○並く流行○松尾桃青今年薙髪して風羅坊と号す深川に庵を結びて傍に芭蕉一株を栽る 世人芭蕉庵といふ

○十月七日狩野探幽法印卒 七十三歳三田大聖寺に墓碑あり按ずるに内速寺也といふ

○同廿四日三宅常海筆卒 名は元常継子なり常円自性院に葬

延宝二年　四月閏

春天下飢饉倉廩を発して窮民を賑給し給ふ

○二月六日古筆了佐卒○二月芝金杉新堀に人家建る

○同四月十四日古筆了雪卒 六十四歳初了庵と号す其子了任あり

○九月木挽町山村長太夫芝居にて若衆歌舞伎を興行す 此時の名代歌舞伎囃子若衆といへり按ずるに寺若衆の始に並びて二年末に芝居町夜の座事の日の出狂言有しを停止され京の坂田藤十郎山村文左衛門等にて若衆の始にて男女交りて若衆狂言を催しけるをいへり さまざまに寺若衆にて若衆狂言をおこなひしなり

同四年　丙辰

七月四日五日風雨窮東洪水○九月鉄炮洲築地にて宝生太夫勧進能を興行 一年不春とあり 此の事なく雨降○八月十七日儒医林羅山の孫京師柳谷にて卒 名子苞号難斎本姓本翔霊塔を謙の始とく云○九月廿二日夜子の刻増上寺文字失火黒本尊安置の所炬火盛なりしが一人身を跳して堀中に入黒本尊を捧て庭に避くる衣を着たるもの或は倒れし或は倒し不見者もあり又右足踝少し火傷して灰燼の中を取て拾ひ獲たりしを

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用

接てりくの如しとぞ云く（以上浄土漫筆の文を畧せり）○十一月七日暮六半時分京江戸町二丁目より失火して角小路の廓焼亡す此大廓焼ざる事前年の如くにて焼る（此時抱女十二人焼死す其後の脳をこゝに附す）○十二月廿六日江府小火数あるもの一和漢合運あり未詳

延宝元年　丁巳　十二月

此月八日下谷池のそこ横田七郎右衛門つかまつる事を蒙ひ願て雛弐対を鬼子母神に納しむ其翌年小舟町三又川より出火して今日鬼子母神像を感得して接七所なるつま男子をはじめ悉く焼亡像を奉呼奉仏号安置せり○七月中旬より江戸中町〻踊あり（京の一年ぶり延宝己の年ぶりを踊るとぞ）○八月六日大風雨未挽町其外潮よる

○江戸鑑板行す七巻　○幸朝改元考一冊刊行　雪加翁編

同六年　戊午

玉瀬上人奥澤村浄真寺九品仏再興す　○東海道驛路絵図五冊摸行（他者未詳）　○平井堀出し居宅元旧代官市村行之丞義その芸ありて容貌も美麗ありしゆえ寵を蒙り普請の門より入り今年廿五才にて行之丞義富清翁しかして再興せしゆえ葬祭の日列髪して葬送をつとめ其後の幸呼五ツ日目法華経を修せしめ世平井の菩提寺となりよ（享保三年ふ寂せり）○十月六日牧野越前守成貞卒七十二才

○同月八日古筆二代了栄卒　七十七才

同七年　己未

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

夏大雨大川筋こと外あふる

○十一月二日浪人平井権八品川にて刑せらる 法人の初る而亦是いまだ但一寺葬地

の犯云ふ情を流の長云ふをを元須て刑りしをもて同一時式と

そふ人あり其云ふ湯いをふあゆ一の人ふして権八よりあるし

○十二月十二日連弁師里村昌通卒 六十九才

延宝八年 庚申 八月改

正月八日薮本春翁卒 松葉坊稽次と号し大阪の産をあつまて浮戯を能し

辛酉雑考に多ふ 図今年一要一 ○二月十日朝五半時ふ近隣夜の如し一 ○京両講堂

葉師沼ふ年表 ○二月薬地再建 西本願寺今年旧地より薬地ふふ

て二月中旬建立あり一中或云ふ九ふ元ふり而本願寺後薬地へ引りて

而向ふ中旬建るより一寛文二年の江戸名所記ふ元ふまふ此時始て建立ふまふ一

周ふ云今新大坂町を元町と唱ふふるふ故昔而本願寺横山町二丁目の東側ふ

あり一此橋の元を高ひ一あふふくあり一ふ而ふく唱ふ一ふふん

○江月和尚寂ふ年ふのごとし一 ○五月林真斎春勝卒 六十三才

○六月廿九日能人松江雅舟卒 七十四才 名宝暦 俗称大ふ略ふ逸一 ○八月廿八日芝如来ふる

立智如来の大仏入仏供養ふあり 再建 あり ○寛八月六日大風而深川本所

浜町霊巌ふ海嘯八丁堀海上ふ渡り上て家を損一人溺ふふ出

橋損一堂宇止ふ谷中法華ふる本堂深川ふて半頃くふ前後再建

ふふふ浦ふ一堂宇ふ新ふ浩波あふて民家を溺ふ

○十一月晦日酉の刻ふり坤の方ふく震ふ二ふ大ふ長井ふる所ふふふ

自ふ雷あり一生穀の実を長空ふ吸ふふ

○越薬於薬集成 二十三巻

延享閏ふ事一

永代ふ八幡宮ふ江戸を離まて多ふの実も稀ふり一ふ処室

のごふ社ふり一ふ第二三町のうち酒肆薬亭を法ふり一ふ多の女を

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

町〻勝手の普請しるし地を換申候樂寺ハ
ふしぎの遠くに房総の群山近くに今戸橋
みてありしことを思ひ処室の江戸図ふよりて知るべし
あり今の
ふと云ふ
○寛政二年刊行 書次序深ゞ河越の
○寛政の改名世説ふ処室二年の編也町の沙汰と云ふ条紙を引
色まきふことく八丁堀の私宅せんべい日本橋のちらし茶のこ宮賂大弘
まんぢう雁町の助こふのやきまめ也橋の
大阪堂の源ふを東條 をふまふ云くあり
名物まつ升屋せりこと云く 焼の木偶今ふ残りて南茶の軒の上下あり

○仰雲上小さき提灯を俄うち 慶長山岩作彩色の絵打ち
らうそくやを ○此沢御溜ふ江戸飲料水
とり新りて廣ふ引き又茶句分という
ころ又引をとり○堀町ふ辺江の通者
又甫喜というふ男を見んせおと 用捨策
○江戸絵図ふ処室の図多けて委しく
實文ふ処室の場とり始りしものべし 処室八年梓行せる西の内拾大本繪巻の
絵屋市兵衛宅にあり元江戸ふるの図いを江戸場二巻あり浅草橋通り瓦町表
ふ場是ふ次りをを乃市とふ板名ふしてをを辺等引くいふ言あるへし但ふ人ふ知
實文の次より室永のころを次市ら探のりのありてふ
一ふ十ふ一ふ十ふ一ふ十ふのあるよりしふ中ふ
処室の江戸場ふ今ふ残りくるをいさ
佐久間町 加州田安ふ
屋敷ふ内也 村松町 御遠門又
本丁二丁目左 弥右町二丁目

今の通り新石町之 二本榎(旧名追分にもあり) 嵐究(神田の臺下) 新小田原町(三河町の) こんにゃく町(神田)
(ちきご丁の内) ちんきの河岸(一つ橋より 神田橋外を) おせ橋(今のさくらご 新らし橋) 戸越橋(岸丁かわ八丁堀へ 渡る今弾正橋) 竟
二葉橋(今云ふ三橋之天和旧年の 冨士見へちかう橋とあり) 久右衛門町(向柳原今の並 浜松町四丁目の古名) 法恩寺(上野清水 門外へ入口の)
(清水稲荷社あり) 忍ぶ丁の源(日比谷の東 と記せり) 東叡山入口右の方に天神黒門右の方に池の
源く本知坊あり 池の端通跡地あらし 神田やら上の門の西側に在
北くすき町(浅草田原 丁東側) 今の神田旅籠町金沢町辺一円に加州屋
邸あり (ちとご丁六成今の瀬戸横町の所にありしが後此地一旦明地と成其ご二丁六 今の辺へ引て加州屋敷中にあり其後へ引まて其跡は菜有あり 丁後まで町並となりて今浜町とりの加州屋 鋪中に引ありし所のちまちとかるべし)
今の英町の所本多肥州屋舗 今の昌平橋を仮橋とあるに
屋舗邸あり 今の堀田原の所堀田對馬
新古神橋此とく 支國橋際今の同朋町濱新地の所植木溜とあり

海船の本所辺船着場の通りより東の方ご横堀にあり 今の菜ご橋
ちく元あるの橋とあり支出橋南の方川中に唐船と記して一艘の大
船を画り 吉原にけんどん町あり(吉原南の方より之八家 一本にけんどん河岸 (ろさう))
(ちとの堂塔の跡 未考) 田向浅山門あり
嘆あるべし 八丁堀る流引て武家屋鋪の三之 本所深店(さんおう さまう 濱炮洲十郎町 のにあり)
小濱町 沼戸町 志水町 上町(かざも西本願寺の東にあり) 羽根田橋(今の海賊 橋にあり) 白金
瑞聖寺境内に蓮葉の形しるき物あり下にとりろ所の湧水の事を画
あり芝井町にて浜の手に銭瓶あり 赤坂氷川社根津権現社ともに
同地にあり高羽町(でんぶ)向田圃なり亀戸天満宮向銭瓶之 深川よ
渡も支丁後右衛門町新屋敷丁後支衛丁堂あり越中
島へ御茶錠守中屋法部屋あり永代嶋八幡宮海辺さらしあとく 本星
嶋崎屋鋪は道に入海にて永代浜に對せり

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

天和元年 辛酉 九月廿五日改元

二月高田にて護国寺草創 上野寺中八幡別当護持院法印亮賢草創 五月院家と成る

○浅草川広がる○諸宗凱旋(きえん)○山王神田の祭礼隔年になる 是まで六月十五日毎年に祭りしが

○日蓮上人四百年忌 法花宗寺院法会 ○十一月廿八日丸山本妙寺より出火して類焼亡 ○十二月廿八日川田か窪より出火して四ッ谷赤坂麻布三田芝牛町に至る

○今年両国橋掛替あり矢の倉前辺より本所一ッ目の橋際へ渡る仮橋を設く今の両国を元両国といふ十五年の後元禄九年に今の所へ経営あり

同二年 壬戌

二月六日市谷にありし護本山天龍寺類火に逢ひ翌年四谷へ移さる ○三月廿八日俳人西山宗因(にしやまそういん)江戸に卒す 七十八才

○三月俳人石田未琢(みたく)卒 未得の男なり ○四月琉球(りうきう)人来聘 正使名護王子

○四月十七日明の朱舜水(しゆしゆんすい)先生駒込邸に卒 年八十三 常陸久慈(くじ)郡瑞竜山に葬す ○四月廿九日狩野雪信卒 四十才 探幽女

○七月儒師木下順庵召出さる 侍講 年六十二

○七月二日大雷千住正燈へ墜(おつ)る ○同二日落合(おちあひ)泰雲寺寂山白翁禅禅師寂す ○七月諸職人浄瑠璃語(かたり)の類天下一(てんかいち)の号を停(とゞめ)らる

○同月屋形(やかた)船の寸法定あり ○八月朝鮮人来聘 正使尹趾完 副使李彦綱 従事朴慶俊 本誓寺を旅館とす

○九月安宅丸(あたけまる)御船を解ひらる ○九月林祭酒(さいしゆ)東叡山内の地をかへられ学寮を建てらる忍岡(しのぶがをか)より宮殿(きうでん)を移し経堂を建る

○青山権太原長谷寺に古洞佛所弥陀像を安置す 寛永十四年之頃より 昔東本村なる所にありしを大坂

国立国会図書館 タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

城中へ移されしが落城の後江戸へ持来り今村氏が八丁堀の屋敷にありしを常念寺深誉和尚に納めて今年九月送る所なりとぞ

○十一月晦日戸田茂睡の男源左衛門卒す墓所浅草金龍寺に在り 過ぬる向井去来辞世の詩茂睡が追悼の哥人の知る所也へのせて

○十二月廿八日未下刻駒込大円寺より出火 本郷上野下谷池の端より筋違橋門神田の台日本橋まで浅草諸寺同浅草門蔵前町辺矢の倉両国橋焼落本所深川に至る数町のゝく鎮火せり 此火事に遇ふて財宝を失へるもの或は焼死溺死の人少からず 天和の去歳死人多く是を諸人悲泣のさまを哀憫して学寮の了翁禅師年来蓄へ金を出し書籍の料一千二百両を以て貧人に施せり この時池の端仲町勧学寮の市店を建てしが今も此辺より深川の芭蕉庵も火にかゝりければ翁も潮にひたり畑中をのかれしといへり此時の事なり

此火の後本所士民の家を拂せられ深川の田園となる ○湯島天神町屋を拂せられ採る場となる

天和三年 癸亥 五月望

○正月元日大雨洪水 ○正月車長持を禁ぜらる 火災の時乃諸の妨となる也とぞ

○二月六日市谷出火 ○二月十六日牛込出火

○武者小路実蔭公江戸下向 [illegible]を立らるとぞ

去年八月まで世の稀とし家も敷をせりけるとぞ

○本郷駒込庚申塚に住る ○三月廿九日駒込片町八百屋久兵衛の娘お七火刑に行なる 今年十六才といふ其顛末世人の知る所なり十二三才の春松竹梅の三字を出せる横額を出しまの詐欺に掲る公にありこの お七が谷中七面堂のあたりしてある由いへつけしとし又墳墓ハ駒込円乗寺にあり今世哥舞妓の狂言再建せる所なり 外に谷中蔵前の祖師堂にあるを霊巖寺山法華宗寺にて云ふ八百屋娘お七十一才の菩提を述宝暦年中三月と出奔又同出所お七火刑ハ天和二年三月と記せるも誤あり

○夏江戸大旱久し ○六月六日当表御内室 玉宝一素居士といふ塔あり牛込の牛内あり駒込海蔵寺に墓あり耳底記に是を山と揩とて人の教士として海勇の人ありとあり ○雲光院本願寺法事を修し勧する所玄年の災後本所回向院の辺より深川へ移る蛤町の北にあり 新行す駒込

うつる○十二月五日江戸焼 舎屋不分方角未詳 ○十七日作事奉行諏訪飛驒守 飛騨高山 ○紫の一本写本 戸田茂睡作

弘化年間記事

安宅丸の御船を解せられし時、安宅丸大船を売るまじ一川の東岸の地へ移さゞるべからず

○大廻船を造る 東金九 東金橋大船始之 ○弥田市九 弥田一の大船 熊一九 秦野一の

山市九 日本橋の船之免許八百石積之 今て大船あり ○隅橋船の名高の一本 江戸

船を捨迷惑すとあり 事跡合考云天和の比小山田江市市といふ人の令旨を得り奉ひ元禄八年迄も数一けるに至ては町ごと夜川岸丹町を築ことそ大廻船

○俠客源見十左衛門遠流 元禄十八年を恵て宥免永井肥前守 ○千川上水出来 元禄天和の比迄板橋の両方練馬の

のうち石神の池の方より本川筋迄ひ柵を設ふ事ありしを流を千川上水と改ふ享保七年迄より止なり又同一所の内溝川の方流を業平橋筋ふ引くる又事所井ふ掛くるを白堀上水とのふ是も享保中作るる所上水の川筋今も業平橋の東北の方の橋際より葛西御廻船の方へ通りて小川一流あり是別を白堀上水の筋あり 以上事跡合考ふお

○弥田永寿町の地へ作事家皆川町へ対ふ家迄家並ありしを天和中焼作事家へ中谷へ引けて元禄町屋となり永寿町と云対ふ家へ松平下総屋迄屋敷となりしより皆川町とふの松平下総屋迄屋敷となりしを田振舞屋敷弥龍寺迄丹町代地の不も元禄以来迄ありしを其節浄るり流行せ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

○天和中深草元政經藏ハ商人の荷物を入置し所より失火して燒亡ス後再興ありしとぞ

○紫の一本(ひともと)に日本橋一丁目讃岐屋後町々の西北ハ勘兵衛といひしもの始めて池のもとのねん安兵衛屋本家る場の菓子屋兵衛その陣二屋唐餡饅頭町の壹匁の温飩云こともあり此時代のもの始まりしといへり○此頃はやりし唄比丘尼の内神田めつき町（多町）よりいでゝ羽二重おび後まで川にて絡といふ名より出ておりしとぞ君を兼ねて客の揚(あげ)代(づきん)の乙を嬉子(すびん)を見て茶を嬉子頭(すびん)とよみて来たりし又寶永の頃までありし衆(さつま)といひしも此頃にてありし

○此時代に喜多(きさん)靈山の書行る　一年小村氏とゝ靈山ハ肥後熊本の産にして京に立と号し加藤家の侍医なり加藤家の断絶後細川家に對きる由ハ小三立も又細川家に仕へ其父三立も学を成せし長崎にて陳元贇に遇ひし靈人に令を靈山も初より学文を好みし名人となり醫術法を白授して終に

の交元ありし其後未陽元師の出從獨立来て山に方外の友としてこれを成ふの書ハの所の因とあり或とき獨立曰いかほど書ても筆力精神靈山に及ばずといへり本家の藥の傳ハ獨立あり後ハ二立ありて二立兄弟ハ滑稽しけるとあり靈山江戸に来り其藥の傳と同伴して来た山陽藥も本来る後室町深世に務に偶居ス此時に延寶年中あるべし門人五六輩あり後廣沢もこゝ二人く云ハしくハ二老男侍にあり二老と云靈山廣沢の二老ありて文を世時人傳にもいさゝかその傳を学ぶより

○池乃端錦袋圓(きんたいゑん)行る　勧学院の了翁禪師ハ羽後の産なり幼より仏學に役し一代藏經を寄付せんとを発願し發行を修しけるが寛文二年に及り去年火燒を焼せし一指痛みてなやみしなりけるに夢中に老翁来て與授する霊山如定禅師より薬法を授り此に平金を得よとありて勝の霊の内より兎がしてもれまさに是にて錦袋圓と号ス後来此山の林藤にて表七間裏行廿二間の市店を開き此薬をひろめて志有の教鋭の料に充てし其功ある事を年に余る其ゆゑに随て江戸に弁近在迄でも似せ薬を調合して賣ゝの者人といふ事をきゝて其弟童を擢て五十人余を養ひ市中を能細して賣らしむ或人これを了翁に告て云是を防ぎんハ其下の茶ハ行く處るへし若廢されハ大利あるべしと答て云寸志未しきりなるは事なれの事の二ハ法人を助け救んとするなり若他に薬を賣て妻子の後りともなるゝハ本意の一ツなりと或人又曰若彼の業人に益あらハ料ハ己か本の協ひへし答曰日月ハ未地に落ス师て天にて得させと同善數回にして互に大笑しとぞ

○正月晦日服忌(ぶくき)令(りやう)改定○元三大師七百年忌

貞享元年　甲子　　二月廿一日改元

○加賀藩を湯島へ移し、移しあとのまちあり
○弘法大師八百五十年忌 ○二月廿日古筆二代了祐卒 年七十才
○本願寺七代琢如上人より麻布 某坂 移る
○九月廿二日官医岩本玄琳卒 麻布 祥雲寺 に葬す ○九月大風家屋を吹倒す ○十二月園基師 保井算哲 天文を司り貞享暦七巻貞享暦法通書五巻を編述せり ○甲子江戸鎮利行 松倉家校式證 板行の始という ○幕吏改暦領行 但宣明暦を改めよ

貞享二年乙丑

二月廿二日流星東南より西北へ光数百里を照し響く 穴て空中 ひびき あり雷の如し ○某この日急変観音開帳 浅井了意 この説なきを 三田の山猿ぞそもきよろんぐーもせど ○五月保科子福昌寺を芝麻布へ移す 此寺開山天文中

の像あること 不遠 ○日暮里浴泉寺智泉院別当を兼ねさせ東叡山浄名院兼帯となる ○九月廿日将軍家綱公薨 ○六月浅草寺智泉院別当を兼ねさせ東叡山浄名院兼帯となる ○九月廿日将軍家綱公薨 七十三才 ○十一月霊山る再檜林 ふたたびぐんりん と称る 此時浅草寺本坊焼亡 文革不本而へりる

○同三年丙寅 二月廿

正月一日古筆了世り周章 ○園二月利根川 とねがわ を武蔵と下総と定めし葛飾郡二ヶ邑不詳 武蔵葛飾郡ら中古下総に属せり今年 葛飾郡ら葛西へ移す 葛飾郡ら上代 苦のごとく武蔵葛飾郡に属せしめおこり ○二月 同七年二月 伝授あり ○九月小石川御殿成 ○九月大小神祇 じんぎ 祇 を 罪科 ざいか 不那世こる 神祇 神祇 祖 と号しこる 漫筆不仁本祖とする六月会まり ○九月大小神祇祖と号しこる 漫筆不仁本祖とする六月会まり

同仁年丁卯

三月十八日より浅草寺観世音冥賀○同寺二王門并令胴観世音
勢至像建立 願主と称する邑楽郡波林寺隠室清
亜房存静千波井巻三部経書のこと
○江戸無尽子七冊梓行 発者岩田氏
○七月廿二日より廿六日まで寺社寺文幼童経巻行
○女用訓蒙図彙板 古時代の民俗
又ふるまう
○三田実相寺貫女塚念誦会愛
ある村田俗名のことの著ふ嫁して貞操あり
と近辺の評判ありしが
ひそかに食を減一日をへてそこ
る所 紀事ふしぎにその事の後まで松の操のこと
その貞操云々のこと
のこと
あり

壮年間記事

貞享元禄の頃より江谷町辺
```



○貞享中浜町あり六々橋流るまでより掘る事あり
巻志料ふ中古田沖丘陽宿澤の名あり
いこと 国史云中古江戸の二大橋と云ふ
いひしこと元禄の頃老人のおうりありしこと
○弥迎光源寺大観音造立 江戸の町人
町屋敷を求て寄ふ寄附
一今ふ浅草の料ふ死つ
○千解通 江戸
というよりの立ふて当ふ一という
○此頃村随見南新堀ふ一丁目へ移る
川岸まで人の通り辺先を矢来土ふ芝を作せ裏
居宅屋葺土蔵造あり明屋敷
江戸へ帰ることを随見ふ許ふの明田をひ
可りふ功あり江戸へ帰中明ふ
○貞享の頃より大森村の辺まで海
○この頃の江戸図浅草花川戸とあり
```

○廿日頃云　婦女の着く風俗（かっこう）并（ならび）に貴賤の乗物厨子前垂の故
徒（いたず）らに長（ながく）して人不便（ふべん）に成（なり）候（そうろう）間（あいだ）改（あらため）候様（そうろう）町触（まちぶれ）有（あり）
まりしとあり

元禄元年　戊辰

當春（とうしゅん）年前（ねんぜん）の地（ち）元（もと）の如（ごと）く武士（ぶし）町屋（まちや）を立（たて）分（わけ）らるゝ事（こと）
此時（このとき）より年（とし）の亜（つぎ）ぎ亜ぎ年号（ねんごう）を改（あらた）むる
事（こと）左（さ）の如（ごと）し（吉川氏（きっかわし）の説（せつ）を引（ひき）て茶（ちゃ）の下（した）に移（うつ）る）

○九月（くがつ）并田明神（なべたみょうじん）祭礼（さいれい）練物始（ねりものはじめ）

○十月二日（じゅうがつふつか）儒師（じゅし）両山（りょうざん）縦横（じゅうおう）并（ならび）に　名（な）所（どころ）桜（さくら）
養玄院（ようげんいん）木（き）葬（そう）

○十月十八日（じゅうがつじゅうはちにち）連（つれ）弁（べん）師（し）墨村昌程（すみむらしょうてい）卒（そつ）○十一月（じゅういちがつ）并田橋（なべたばし）御門（ごもん）外（そと）知行院
を移（うつ）さる浄珊（じょうさん）跡（あと）となり乙亥（きのとい）年（とし）より改（あらた）て筑波山護持院（つくばさんごじいん）元禄
寺（げんろくじ）と号（ごう）す（此時（このとき）湯島（ゆしま）より移（うつ）り拠（よんどころ）なき子細（しさい）有（あり）て
元禄（げんろく）と改（あらた）む）

同二年　己巳

正月（しょうがつ）

正月十二日（しょうがつじゅうにち）儒師（じゅし）今井弘斎（いまいこうさい）卒（そつ）　号（ごう）魯斎（ろさい）
年（とし）廿（はたち）餘（あまり）

○正月十六日（しょうがつじゅうろくにち）辻（つじ）老人（ろうじん）星（せい）現（あらわ）る　老人星（ろうじんせい）古（いにしえ）より瑞（ずい）ある
事（こと）を云（いう）ふるの星（ほし）ありといふ

○五月十六日雨天三十三間堂（ごがつじゅうろくにちうてんさんじゅうさんげんどう）にて俳諧（はいかい）
千二百句（せんにひゃっく）を興行（こうぎょう）して江戸（えど）の天下（てんか）つゝと
○十月婚姻（じゅうがつこんいん）の時（とき）のあひせ御制禁（ごせいきん）あり
○十月廿五日夜異星（じゅうがつにじゅうごにちよるいせい）巽（たつみ）の方（かた）にあり
湖（みずうみ）ごとし　名（な）ある学者（がくしゃ）の始（はじめ）なり同七年（どうしちねん）法令（ほうれい）に不載（のせず）
○江戸図鑑綱目（えどずかんこうもく）板行（はんぎょう）　重（かさね）て川流宣（かわながれのぶ）後（のち）の
編（へん）なり一枚（いちまい）一冊　○再訂江戸惣鹿子（さいていえどそうかのこ）板（はん）七冊　松月堂（しょうげつどう）
不角（ふかく）編（へん）

同三年　庚午

二月（にがつ）虎門（とらのもん）外（そと）左馬（さま）町（まち）より汐留（しおどめ）まで大立町（おおたてまち）より元材木町（もとざいもくちょう）まで

廣徳ともある長崎町の廣徳寺を寮
海藻地海苔を店売を建しめる 長崎丁の西廣小路の南北通り
桶丁の名ここを西大工町とある 鉄炮
○同十五日不忍池弁天の葉落ち空しく無上人等日念佛會滿參詣
群集一十念を文字書の名号をとかす事數一

○五月芝神明社 威臨寺 今天王寺 丈六佛建立執行来詳

○十月浅草寺塔頭別当伝法院にて供法院と改ル ○勢州産文集版 百廿巻

○十二月十七日金剛王横谷宗珍 ○東海道今開通駕籠
寺を乃字橋 菱川師宣居 ○十二月廿二日昌平坂大聖殿上棟 是まで忠吉ありしが
この節の坂を 今年この正しくうつしゆ
昌平坂と改ル

元禄二年 辛未 八月望

正月湯島斗大聖殿御普請成る 上棟ありしより
る迄ありしこと故ここに十箇月

弥之を設くること七十二間半 先儒の像八画工狩野
同十一日釈奠あり 是より湯町八代官屋敷の地廣ぐりしを今の正代地をあひて移さる 二月なり

おなじ橋を古名一石橋 昌平橋と改ル

須大成殿新落

芝山

登こゝ昌平坂峨、士山東斯度斯経始俊忽成廟宮隆功
依勝地荘観聳清穹畫棟麗輪奐鱗甍真玲瓏四配玉床
下雍容珠簪中三才抵太極六経定折衷禮楽孚雅飾文
教克磨礱山知仁有楽川聆道岡窮時否欲浮海栖遅帰
魯門豊祀誠如在吉蠲捧芳樽神明永隆監國祚齊乾坤
春入舞雩節代雨澤黎元

○二月麻疹流行 ○同九日俳人一柳軒不卜卒 本所法恩寺に葬

○同十日俳人福田蓼汀卒 六十二才 ○二月碌文谷法花寺中感應寺
市谷自性院法花宗檀田派をあらたむ 文谷の天台宗となる 七月日蓮宗

国立国会図書館 タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

怒田派の彫作を学ぶ。流さる。○今川橋より小川始て掘割る
○六月十八日紀尾根東叡山覚鑁上人来年五百五十年忌奥之表
大師と追号をあり。○七月宣旨并ト養罪ありて伊豆へ宅
流さる。○八月湯島霊雲寺建立あり　号院紙菴半斎
江福寺不葉を
○十一月十九日茶人清水勘兵衛　岩山浄
嵩和尚
○芸流房空無上人勅免して造る所の金銅立像の六地蔵を寄
眼ありて江戸六阿弥陀川　寺院号華
都鄙事祝午あり
○能優名取良之助後踊不飛行　生角
○骨董集六編六冊中冊大流布を引てそれ
違あり元禄に年寂せしとあるを浅井了意
ふ代物代りと云大雑書に浅井了意伝へ
出あり云々とあれども了意伝へ今考へ
侍の方あり。一析多。新伝等記あるもあり。
泉下のひとあるいまそれ何ぶよりいまこそあるあけを

元禄五年　壬申

正月元日来申の時日蝕七分半　○浅草寺観音堂造営
○大塚護国寺建立　○六月五日より修理を始る観音堂
如来園向院あそ寄進　幸田露伴文婦子息三人の像
○八月浅草子司大久保氏忠宣父母と須弥壇金あそび扇谷
忠先生の墳門あり立寿ありけり那上州の薬をとりて湯り
牛湯長命寺の桜さくらもの汁等不学えてこ文服ふるのまあ而
の今ふるりても好楽あり
○九月浅草川流防町より聖天町まて敷生禁制のる札を
建てらる

岡六年　癸酉

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

書狀已後も法然上人自作像沢庵
○正月備前藩[うん]池田綱政卒 名は[ママ]福松令卒
弱冠竜光[ママ]院と称す葬
世上の疫病[えき]行[ママ]事を告るもの有て此疫[えき]
を除く其法の書物を梓行せしより世
ともを刑せしむ元禄
○五月富[ママ]通町を小川町小石川[ママ]傳[ママ]馬[ママ]
○六月廿八日鄙[ママ]俳[ママ]を南二[ママ]圍社を
記を引てかくし天下畢竟田舎ものゝ句を吟ぜ
俳[ママ]須臾[ママ]にして両国[ママ]橋[ママ]を大橋[ママ]と改[ママ]る
○七月新大橋[ママ]成 長[ママ]橋[ママ]落[ママ]
五年の冬深川大橋[ママ]を
橋の上芭蕉 同[ママ]橋[ママ]落[ママ]一時
おりくおいさびて該橋の柔 月
葬送の扮あそ「一枝手[ママ]塚も
本の雫も花の雫[ママ]
生角

元禄七年 甲戌 五月[ママ]

○五月八日狩野洞雲益信卒 上野護国院不葬
○七月深川霊雲寺[ママ]焼失
再建あり ○六月深川霊雲寺[ママ]八幡[ママ]真[ママ]
○六月廿六日杉山検校伝一寂 八十余才
○七月深川大[ママ]橋[ママ]落[ママ]
一説不[ママ]
乃[ママ]八情寛を勧[ママ]
牛蒡[ママ]子[ママ]を食[ママ]て
と云[ママ]文殊院[ママ]
○八月[ママ]日小塚改[ママ]尹卒 七十才号蓬雲[ママ]
○深川宜雲[ぎうんじ]寂剣 世[ママ]云一[ママ]
寺[ママ]あり ○[ママ]日
を勧[ママ]
○増上寺[ママ]二世[ママ]
○十月七日奥澤村[ママ]
○深川[ママ]名不詳板行
○増上寺[ママ]二世[ママ]
○十月七日奥澤村[ママ]

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

○十月十二日芭蕉翁浪花に没す寂ス○十一月十五日亭人山谷金山寺　名武豊
市谷谷干並照
院ヲ葬ル　○同十六日吉川惟足ヲ葬ル　翁享
○十一月新吉原大門口ニ高札を建ラル

元禄八年　乙亥

二月八日未刻大風江戸谷保ヲ町ヨリ本所おひろ札の辻海辺まで焼亡
○三月儒師谷一歿ス享　名松号已千泥谷
長谷寺ヨリ葬ル　○柳原押廻稲荷の假宮焼
内棒木減ス　○五月官医余淀吉ヲ追放ス
○五月芝増上寺源誉存貞師ヲ国師号ヲ追賜ス
○七月護国寺正徳正ヲ建ル○八月朝日寺所在漂ヲ入佛供
養あり　五百羅漢像を掘刻ス是松雲禅師ノ
ヨリ施主勝察ハ大久ヲ芝葉山の掘刻あり
○九月明の人越禄師寂　水戸侯ヨリ
禄師ヲ基のちあり

○金銀を吹直さる九月ヨリ通用ス
○十月中旬ヨリ大小屋を建ル○十月十六日東叡山二世公海僧正遷
化ス　年八十九　○十二月報寺座摘辺ヨリ出火新橋まで焼亡

同九年　丙子

新橋始て掛る　元禄金銀元字金銀ノ
ヲ黄八今の幸橋を架ス新橋ト
云ヨリ新橋ヲ
大手ヨリ外の門　涼庵
○三月十七日官儒人員
○正月牧野慶成家洪鐘を鋳せ
○五月廿七日上野中堂本号堂師如来ヲ
迁ス○同廿七日光源院ヲ
福寺ヲ
○金銀流通を定ラル
○六月十九日大地震○十一月十六日東叡山中堂雲院ヲ

遷化　訓点法経法范尼多く上木を　こゝろざせ世に益ある事といへり

○十二月十二日水府侯儒臣平野雪菴卒　八幡中来の京に葬る　碑文は平山紀がつくる

元禄十年　丁丑　二月至

五元集拾遺　大小の吟

大庭をしろくさくる霜の師走かな　其角

○正月十五日北村湖春卒　五十余才

五元集　湖春をいたみて

泣く〱よむ源氏冊もありあまた　其角

○正月法然上人に円光大師の諡号を賜ふ○亀戸村にて銅銭を鋳させらる

○下谷五条天神今の所に遷　昔は上野の麓広小路火除の地にありしを瀬川様替られし今年移されしも此所

昌平の宅地へ○酒運上法定○五月八日より新大橋を架けて享保(?)

勧進能興行あり　宝生大夫助之を勤む○六月銀座令通用始る

○同月諸国庄屋十二人に定む○七月より護国寺観音堂護持院

大日堂造立○九月亀戸天満宮神主の法式白川吉田に従ふ

寺社方の例に准ずべき旨　勅許を蒙る

○十月十七日大塚上の町より出火本郷より小日向牛込田安番町

まで焼亡す

飯田町世継稲荷の地は松平近江守の屋敷の跡なりしが火除地に成て町屋を移されて飯田町と呼しとぞ

同十一年　戊寅

正月十三日画人桃田柳栄卒　名守光号幽香斎　池上本門寺に葬

○二月川村随見　石川某を遣して瑞賢をもちて天和二亥年　貞享甲子年にも

大坂川々治普請を命せられ切て江戸に帰りて年寄役と改む

安治川も改修成る○五月小石川御殿造営
○六月九日医師板垣宗憲卒 歳第七十 号桜痴 墓谷中感応寺
○七月深川海辺一万坪を築立つる 俗に八万坪と号
○七月廿三日朝曙白令法殿まで焼ける
○八月鍛冶橋今日より避病院となる
○八月東叡山根本中堂文殊楼二重門并山王社 今の西照坂 御造立
廿八日神堂入佛あり 九月三日供養 一時不豫 山内発病の者多し 一説に疱瘡 山内発病の地もあるよし 又麻布の光林寺 一説に疱瘡 山内発病の者多し 又麻布の光林寺
町屋をひらき新宅小路となせしもこの時なり 又麻布の光林寺
のうち表門通り柳町裏門町まで元拂せしも此時なり 又麻布の光林寺
南郭文集 東叡山瑠璃殿
一旦経営結構新し 入門何処避紅塵 玉楼金殿高き多少ソ
不レ庇貧民七尺身

○九月六日疫痢殿の勅願引き続あり 川東中堂の堅横の文字かゝるも遠ひあらく
堀こそ狭くともひろきを清きとして 今奥を狙って実意殿の前水備て玉実意下ゆ
敷賀水沸よ 病人多ありて疫防刻一漆塗箱を施
○同日己刻る新橋南鍋町とより出火 大名小路通町筋
弁田作兵衛野店 幸橋御濠第山谷千住掃部頭 松平伯耆守 第
廿二万坪焼きて元禄十巳年より深川永遠教寺屋敷 寺院
河岸八万の道程十五丁ある○二階附神社仏閣あり 東叡
山中堂 安藤対馬守 第四第町〳〵残る○
○十二月廿二日午刻 本所石原町一丁目 町屋不残一時あり
人多く死す○十二月両国より出火 潮汲橋せる 巳十六才 呉服町二丁目
○十二月廿二日佛師本所 名員幹 千束村 葬送

元禄十二年　己卯　九月改

本國橋山町繪矢の店舗左右半災後今年二月両門跡の本邸
屋敷替を命ぜられ（享保の始）汐留通築地へ
一軒ずつ移さる　矢の店舗の跡へ町屋広小路とあり大名小路と成と云
店舗甲乙記し別矢の店舗あるべし　此宝の宮ある
旧下役も有しとあり久松を表八ツの店舗ありし　此八の店舗と記せり
我が志料出云柳橋八柳原の末より世に新柳橋
の南葉研堀ふさがる橋を元柳橋といふ新橋
橋といふ此西にありしと　此宝橋この所よりしと云
西ハ広小路あり　昔八広小路の南の方より大溝あり
元禄の古図あり　今ふさがりて其溝の名なし　此溝を引まわして
左右今ふさがりて其溝の名なし　此溝氏も宅を移して五度の
別荘とありしと鴻氏の支流遺ふさがり　此地なるのを見久しくあきあり
後明るきが如し　一の今雑のみ水をのうまるのを
筋違ひまで焼亡　○二月社天和尚逝去大山巖なり　○二月二日没のかく
○二月社天和尚逝去大山巖なり　○二月二日没のかく
筋違ひまで焼亡　○二月二日二日本橋辺より南小角千年忌法事

○八月十九日大風　○九月六日川村随見卒　二月廿七日下向あり　中
同十三年　庚辰　　月廿七日下向あり　中
二月下旬東坂より出火浅草辺迄焼亡　　年忌天誅す
○後園ちかく城州淀藩清源寺寮迎如来寺住　　月廿七日下向あり　中
ありしが一日越八十日のうち江戸始その寺住持の
辞筆戦ありしとぞ　　只ハまされるまひろの下向なり
○永代浜築地六万坪成　○八月十七日より葛西飯塚村久兵衛世話
御願ふり二年目にて竣功　○深川佐賀町今川町の辺ふかし
村木同断六万坪の地をのぞきて引移る今の本所あり
○此年辰より巳迄天変地妖をもとむ

辛巳　　年

正月元日卯辰刻日蝕　○或記云永代橋の辺より大川両所の

出産ありしより今年二月元日に至る〳〵何の病ともなく女の首
級あり人々驚くこと限りなし是をまのあたり悪宰地邦(ちほう)に告ぐ世人語てかたりぐさとなしぬ
とて是をまのあたり悪宰地邦に告ぐ世人語てかたりぐさとなしぬ
又元集 生前の白牛 松枝やあるもの多も八百本 ○二月東叡山寛永寺
寒牡丹 来詳 ○二月十九日吉祥五代の将軍(しょうぐん)五十七才 ○二月天海僧正八百年
法会(ほうえ)楽(がく)等あり両日付録に詳(つまびらか)なり ○二月十七日より廿日迄
又元集 生前の白牛 松枝やあるもの多も八百本 ○二月東叡山寛永寺
寒牡丹 来詳 ○二月十九日吉祥五代の将軍(しょうぐん)五十七才 ○二月天海僧正八百年
法会(ほうえ)楽(がく)等あり両日付録に詳(つまびらか)なり ○二月十七日より廿日迄
幼る而已(のみ)ならず貧(ひん)に迫(せま)り ○三月麻布(あさふ)浄土宗(じょうどしゅう)初て富(とみ)
○三十三間堂(さんじゅうさんげんどう)深川木挽町(こびきちょう)
○深川(ふかがわ)浜(はま)八幡宮(はちまんぐう)

○仏燈(ぶっとう)ともして本所法恩寺(ほんじょほうおんじ)の前(まえ)非人小屋(ひにんごや)を焼(やく)
○十二月和人(わじん)冬(ふゆ)長谷川(はせがわ)安清(やすきよ)番(ばん)奥座敷(おくざしき)浜(はま)の三人(さんにん)高(たか)
浄瑠璃(じょうるり)

元禄十五年 壬午 八月改元

二月十一日(じつ)日比谷(ひびや)町(まち)より出火(しゅっか)青山(あおやま)麻布(あさふ)を焼(やく)
土の時麻布浄厳院(じょうごんいん)殿(でん)品川浄厳院(しながわじょうごんいん)殿(でん)
おしめ(おしめ)もの時(とき)も 二月十五日(じつ)日本橋(にほんばし)のよし(よし)
こまもの絵(え)もの ○二月十五日(じつ)日本橋(にほんばし)焼(やけ)亡(ぼう)品川浄厳院(しながわじょうごんいん)
再建(さいけん)
○京(きょう)より葛西(かさい)飯塚村(いいづかむら)久兵衛(きゅうべえ)親世(おやよ)善(よし)法(のり)寺(でら)迄(まで)参詣(さんけい)
集(あつま)る事(こと)夥(おびただ)し村長(むらおさ)の家(いえ)より貧(まず)しき者(もの)の茶(ちゃ)そまで
とて法人(ほうにん)を求(もと)む(又江戸(えど)西(にし)くの方(かた)より五七日(ごしちにち)つゞきて
往来(おうらい)せり)土地(とち)も村門(むらかど)のおこ
○天満宮(てんまんぐう)八百年(はっぴゃくねん)浄厳(じょうごん)院(いん) 西行上人(さいぎょうしょうにん)五百年忌(ごひゃくねんき)宗祇法師(そうぎほうし)二百年忌(にひゃくねんき)

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

○正月元日恒例霊岸板の橋とうり霊前をおろし眼疾を祈るの洗つて験あり（れいあり）（いのるの名いはゝ）

○六月廿七日湯島霊雲寺山浄巌和尚覚亮比丘寂（世寿六十にといふ）迫世の頑徒（ごせのがんと）

○同八月廿一日平人北村正右衛門（瑞林寺中玄妙院に葬）

○寺領村百姓代佐右衛門つら娘ひさ此の義本とり不動尊の像を拵さりの図新法帯をもつて納む（駒田義貞の法名あるゆへ義貞の法名あり一也）

○真徒（しんと）翁五十年忌（寛月十八日浅川の人宅にて執行）

○十二月十日浅野家の義士堀十七人本意を達し（本人口外多きをもつて）

元禄十六年　癸未

二月正日浅野家の義士十七士自尽（じじん）泉岳寺に葬る

新撰子息帰宅（きたく）ありて（妻子の牙（きば）むーらく）好（このみ）あるべし死（しに）ゆきの山（ゆくもふかき源（みなもと）なり）梅（うめ）のむら栄（さか）ゆ（ゆく）名のこる（義士の事を記せるものあり引用の書）

○朱城盛衰（しゅじょうせいすい）　朱城紀談（しゅじょうきだん）　外記（げき）

○彰徳大名記（しょうとくだいみょうき）　摧花集（さいかしゅう）　赤穂忠臣記（あこうちゅうしんき）

○義人録（ぎじんろく）（室鳩巣（むろきゅうそう）忠士伝記（ちゅうしでんき）安正）　山科の女書（やましなのおんなしょ）

○梅の塢（うめのおか）　陽光院記（ようこういんき）　義士考（ぎしこう）

○蓬窓記（ほうそうき）　続秀記（ぞくしゅうき）　義士文通（ぎしぶんつう）

○春暮赤穂記（しゅんぼあこうき）　続本忠臣蔵（ぞくほんちゅうしんぐら）　赤穂義臣伝（あこうぎしでん）（享保巳亥厅鶏肋（ちょうろく））

○二月九日儒師松田晩翠（ばんすい）卒（為今春雪（しゅんせつ）ゐる処の書）

○小柄（こづか）来日慶（よしのり）再興（さいこう）○二月麻布赤坂辺焼亡

○正月廿一日石川彼中（かのなか）る夜の宿（やどり）捉川（とらえがわ）次郎（じろう）某の子勝義（かつよし）十二才にて深川世二ゐる妻子（さいし）を殺（ころ）す（十一年を経る文永（ぶんえい）学（まなび）をてる気（き）なり）

○五月廿五日両人（ふたり）保天連（ほてれん）（三助伴助）門（もん）お吉（きち）浦（うら）う妻子二人の男子（だんし）をせむ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

惣助と号す三番叟のころともそ
○十一月十日儒師坂井伯元卒（号漱軒駒込竜光寺に葬）
○十一月廿二日宵より電強く夜八時地鳴る事雷の如し大地震戸障子たふれ家は小船の大浪に動くが如く地二三寸より所によりては五六尺程割れ砂をもみ上あるひは水を吹出しある所もあり石垣崩れ家蔵潰れ穴蔵揺りあげ死人夥しく泣さけぶ声街にかまびすし又所々崩るる家より失火あり八時過ぎ津波ありて房総人多く死す内川一まいに溢れ引返しあり此時より数度地震ありわけて小田原にては殊に夥しく死亡の者凡二千三百人小田原より品川迄壱万五千人房州十万人江戸二万七千人即（内廿九日火災の時両国橋にて死するもの千七百三十九人といへり）ありし由此時深川三十三間堂覆る廿九日夜より両所に及びて起り止む事なく十二月まで震ふ事度々あり

深川八幡宮の鳥居も倒れたりとぞかかる御代の事なり（ことし中院通茂卿）
○十一月廿九日夜大風本所辺より出火して谷中まで焼る又小石川より出火して水戸殿上屋敷より大手前小川町通り筋違橋向柳原浅草茅町東の方浅草より御蔵前町小舟町堀留小網町本所へ移り回向院の辺深川永代橋まで（西の方）新大橋まで焼失す死亡の者多かりしを世に地震火事といふ○回向院（一云）観音像山門に安置し給ふ十一月霊巌の告ありて楼上よりおろし奉る廿二日夜地震の時山門は倒れつづいて廿九日の大火に此堂焼たり此時本堂を引退てつくりなほし又より諸人信仰いやまして参詣群集せしとぞ（一云観音より六ヶ一云移転してまた念仏叶ふといふことといへり）
○此火事に俳人其角が家焼たり「焼にけりされども桜さらぬうち　支考」
梅が香やまがき一重に焼見舞　牧童

卅年間記事

元禄の頃杉山検校信都江島弁才天の霊験を得て針術の妙を得本所一ツ目に地をたまひし頃此地へ弁才天の社を営む今に有りて其旅の持之
○雑司ヶ谷鬼子母神参詣群集する事始る 江戸町人伊勢屋宗三請といふ者社を再建も
○白金覚林寺宝剣 加藤清正朝鮮王の連枝を連至来りしを見て把後生本妙寺宗山と成り貴人高山宗基と成日然上人と号
○湯島天百螺山鳳閣寺宝剣 当山派触頭にて此時は湯島天満宮の下にあり後今の霊岸島の東へ移りしが後青山へ移る
○江戸鹿子江戸図鑑等に載る此時代の名家名物大略を左に挙する

△儒者 八代洲河岸 林弘文院学士 常節 遠藤内人 貝原元 同 玄竜 林源三郎 坂井伯元 同伯隆 鹿島町 木下順庵 浅草 津田伯栄 京橋 深尾大学 大伝馬町二丁目 斤山 宗元 八代洲河岸 浮庵貞 辻春達 △神道 京橋 吉川惟足 数寄屋 社家
△手跡 居三左衛門 西久保 佐々木万次郎 中村立長 △古筆 了利 本石町 畠山牛庵 ふや中ツヤ了伴 ツヤ了珉 △弄琴 牛島 石黒常軒 京橋 清水宗川 同
本橋井上一 市谷田町 茂山勾当 △連歌師 里村昌程 同昌陸 同昌純 同玄祥 同紹春 石本町 △俳諧師 本所 芭蕉 本町二丁目 河岸 涵山 石町四丁目 才丸
山下丁 工坤 南小田原町 其角 麦寿 二丁目 調和 伊勢町 不卜 幸 入日町 言角 又斎泰

町山下 石町二丁目 嵐雪 南伝馬町 嘉言 伊勢町 一晶 本町三丁目 立志 又斎 大伝馬町 沾徳
堀江町 梅中子
△絵師 幸町 狩野洞雲益信 新橋弓座町 狩野養朴常信 おが町 狩野永叔主信 同丁 狩野友元 桑附信 鍛冶橋 狩野探信守政 同 狩野探雪守定 竹川町 狩野友益昌信
狩野友内 友信 同外記秀信 木挽町二丁目 狩野休円清信 同 狩野内記是信 深山守
狩野春雪信之 同 狩野一学知信 八丁堀町 狩野求馬胤信 木挽町 狩野内匠英信
狩野之信
△浮世絵師 橘町 菱川吉兵衛 同 吉左衛門 古山新九郎 石川伊左衛門 杉村治兵衛
石川流宣 鳥井清信 菱川作之丞
△浄瑠璃 堺町 土佐掾 葺屋町 和泉太夫 三左衛門町 江戸半太夫
説経 堺町 天満八太夫 呉服町 虎屋 喜太夫 吾妻新四郎 堺町 江戸孫四郎 岳庭太夫 呉服町 虎屋
永閑 人形町 辰巳源六 本大坂町 肥前太夫 新材木町 江戸次郎右衛門 相業 芋丁 対馬又郎
右衛門 岳庭説経太夫 同 播磨町 村山金太夫 南鍋町 大坂七郎太夫
△上るり本屋 大伝馬町三丁目 山本九右衛門 同所 △座 三右衛門 長谷川町 松会三四郎
通油町 鶴屋喜右衛門 同 山形屋市郎兵衛 △座元 新寿 日本橋南二丁目 杉村伊兵衛
南八丁堀一丁目 鳥居九右衛門 ぬしや甚三郎 △古今十一 長谷川町 鹿島武左衛門 横山町
三丁目 休夢 中橋 きねや小左衛門 四郎兵衛 △けざ鶴藝 仕附 日本橋 天神下 お水左衛門
△大仏餅 芝田町 つるや △まんぢう 芽場町 塩瀬山城守 △日本橋南一丁目 同 葺屋町
えびすや 駒形 布袋屋 同所 えびすや △米まんぢう 金竜山 ふもと 同所 つるや △ふいご焼
浅草 文殊院前 えびすや △楊枝 芝田町三丁目 おめや 長左衛門 △ちくさう 苑町 譲り や
△麦藁 京橋 浅草 すわ町 柳屋 △縫索 本町 天神前 △焼まんぢう 大伝馬町二丁目
△穀のやき麩 町十一丁目 助惣 △ところてん 芝橋 車屋 △見せ屋 堀町 市川屋 おが丁 きりや

今月掲焉 猿沢町若太夫 本町秋楊お雲丁
亟ム多加をばきり 新乗町 共波亟与作 今
沢潟や 月而厂 今亟 同亟ム あさ ゞ ゞ せんざいわ 八丁堀 夜
清元寿寿 その外 ゝ ゝ ゝ ゝ と 数事まハ 略す

○ 茶小哉さる 菱川う 深世絵 いま
の深世絵師まて 元禄宝永の 比 ゝ
○ 此時代 俳諧 廻り 対始り 世ふ ゝ
安藤川 流行 ゝ 比 ゝ 亟都 という 亟所 小唄 三味線の上 ゝ
○ 一 体 う 此の朝 素私 志の 発一 名
二方 う ゝ ゝ ゝ ○ 幇間 簡 ゝ
○ 一 節切の笛 中古 う 深ふ ゝ ま 此時代 ゝ
○ 世事 浄ふ 揚弓 ゝ みやこ 一中 浄 道を 得 う 一表二百本 ゝ
的中 あ う という 元禄の 比 芸ふ 五 所 本碩 という 女人の ゝ の ま 深

上 ゝ ま り 百八拾 ほ ゝ の矢 員 比 ゝ 井 結 改 物の着 枝 ゝ 元
上 ゝ ま と ゝ う 比 年 八百八拾 ほ ゝ 八 常の事 ふ ー て 百九拾 ほ ゝ 或 七八 ほ
ゝ ゝ ゝ ゝ の 程 ふ 無人 う ゝ ゝ 上 ゝ ま ゝ 深 ま り 下略
一中 という 員享 浄 比 ゝ り 改 享 無 う 想 上 ゝ り 俗の 都 ふ 文一中の ゝ ふ あ ゝ 比 比 ゝ
結改物 十二ヶ所 を 再 打 出 麻子大全 井
載 う 今 ゝ この 態 か ー く 慶 ま ゝ と ゝ ゝ も

○ 菖蒲 こ 年 ニ 前 う 院 観世 ま 以 ゝ
記 ま ゝ く 深 然 比
○ 小 ま 更 麻の子 深 物 流行 ○ 山 本 箱の 祝 ふ 着 ふ 者 を 寥 る 事
元禄の 末の 比 ふ 止 家 永の 比 う 観 蓋 ふ 寥 る 事 ふ 深 ー ま ゝ と
ゝ ゝ ○ 吉 来の 遊女八 朔の ふ 白 無 垢 を 元禄中 江戸町
ま 丁 月 巴 亟 深 ま ま う 抱 ゝ る 程 を 元禄 中 江戸 町 う 抱 ゝ る 女 を その 比 嗜 を う ゝ ゝ ひ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

居けるゟ別荘の霊泉ありし時尋居ける白むくの侭すゝて揚屋へ
しけり客の数ありしとなり是を土の例として八朝より一般ゟ白むく
を着る事ゟありしは花街大全ゟいくり
是等のこともうく武家の例なりとぞ
八朝より白き衣裳を着しゟうゟ尚て考
○享八町堀三丁目伝兵衛ゟ座文弁慶ゟ 杖ゟやすて世ゟりゟ 霊巌洞伝
紀文大尽之能号千山云
を写真家義方筆ゟ 杖ゟ座ありゟ世ゟりゟ 此外大小数十枚ゟ
を写真家義方筆ゟありゟ
人のうわさ花街雑劇ゟ遊び稽くの婦こゟまで一巨万の富を費
しける事諸人の知る所也へしゟ贅せん

○沢辺真砂六十帖 元禄中の
ゟを誌ゟ ゟ那人場ゟ
揚本町へ引移ゟしゟ
伝馬小舟町 小山判官を殺しゟうゟ法と云伝ゟ
ゟ裏家稲荷の

社ゟ小山判官ゟ霊祠あり又素意の坂下汲井ゟ半分ゟ義経袂岩捜
ゟ反魂香塚の下ゟ小山判官ゟ塚ゟおゟ汁ゟ義経ゟ元禄
の頃まで女ありしゟ崩ゟ不参ゟなくなりゟとぞ
○元禄中の豪家伊田佐久ゟ町ゟ住せし尾実庄兵衛ゟの
唐仏の釈ゟの立像を得て伴浄弘福ゟく寄付し伴ゟる事ゟ
有ゟりて下谷ゟ広小路ゟ安養院へ安置ゟ尾実代ゟの墓ゟ安養院ゟ
彼女婦の像ゟありとぞ ○元禄中ゟ
○元禄六年温清彩の汐戸橋ゟ
の汐地ゟ埋ゟる町ゟ名ゟ汐ゟ所ゟ地ありゟ
橋ゟ矢の内蔵のありゟ一ゟ目橋の隊ゟ
ゟ橋ゟ吉祥ゟ橋とありゟ今ゟ昌平橋ゟおゟ橋とありゟ

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

村松町七軒遠江門内 江門の際おそ連雀町の四北の例 有
尚この称
今あり 黄のあめん橋 今の如くあり
のおくに小祖町 三丁目の北の橋を赤う記せり 今の山下西つを
ひがしとあり 明十三年の頃あか潟橋とあり 又は江門を黄八堀江門という 上
山と唱ふる 南の山あり 大塚護国寺の門前 諸田園あり
○三圓稲荷社内小一丈の祇あり 例の楽屋 ふ接みて手洗のかの葉みあと待つるとき
唯ときの祇うまをあらもん ふ稲荷や祇よひおしめうり 其角

寛永元年 甲申 三月晦日改元

二月廿七日地震 同月まで交々震ふ

○安藤橋と新大橋のうふ道を分つる 去年の大火のうふ安藤橋 人多く死するゆえなり

○三月幸号改元あり 祥吟

寛永の給年号を定めの事 冠里公

○五月二日本因流を源元祖奉因親伝 (うんか)
○六月十五日より七月朔日二百余を辺大川筋を押一面 (まく)
に家と家との軒端 (のきば) 屋根 (やね) 一尺余水八月
迄引ず 死亡人数を知ず 本所深川浅草山谷千住辺 (あたり) 屋宇 (おくう) を
○六月廿二日小塚改め幸 幸元養二男称十九歳の第乃幸
書をよくせり 幸六十六之
○七月廿五日より九月朔日まで護国寺 (ごこくじ) 境内 (けいだい) 小屋掛 (こやがけ) 興行
芸妓 (げいぎ) 開帳あり ○八月能人弁 (べん) 竜 (りゅう) 昇 (のぼる) 亡父
○九月神田明神社神遷 (しんせん) 之あり
○十一月雪華再遊 廿五日迄有
○今年お茶梅の法始て 世隊の見世を
出す 名物となり 世事繁昌なり

同二年 乙酉 正月

国立国会図書館 タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

三月より回向院あそび接待昇龍の茶店始まる年表

○同月より護国寺あそび接待大沢山久安寺観世音一つの幸

同寺境内○此月より永代寺観世音築地門徒講中開帳○五月浅草川渡あり

○六月十五日山村座吟前幸　八十二才泥のそこ心苦しき五幸をも語るを聞きて

をもまもらずして世　浜の真砂あり辱世の句あり「苑も見何郎云

後の世をよむるき

○月並新法惑をあそび来年国主薨去の歎迎如来寂滅

○月永代あそび江戸日蘇明神開帳

○今年伊勢家庭訓多し　信ふかく仏を信じ神を敬ひ

家内和睦会釈を

以て雑をうつべき処もあり　孔子曰上旬の江海中洛外童男童女七八才より十四五才ばかりを集めて

多くをいさめる歌一発吹管一楽八法一つもいまだ家内一統ふかひなき事にて法人

犯せる如く妻子従僕にそむかれ家をおこす事疑なき処なり　孔子曰

ふかくて雅をうつべき処もあり　元来清の国の男女一日に二万人死亡方と云う時ハ

治平有極の疫病を救ひなり或ハ布施の小袋備伴菱笠等を

配り五菜二汁の粗末の膳を出し接待あそび疫神の慈悲恐れ

敬ふの報をあさまし又伊勢詣の帰路又秋七八月ふるそハ法会をもとりのそ

いるのおろそかに成敬十里の所を二三日ふ泄還せ一統あり或ハ死せしものの

後を人つらなり一統あり又ハ変あり又ハ疫神を祭り

一大事をなすこと恐し一ふ忽大麻と記して家永千載祀と記せる事紙あるもなそう

高声にて云日並家内那る門境あるひハ門境あるひハ

呉ハ野を隔てあふ呉ふ隣さるふあるひハ

うちそこあり一仮ごさまと云ふまあるひハ

ま仕るべきあやこの仮の報ひ　浄瑠璃もあそこひ

らあ

る

○七月廿六日宮医安田春位薨

○十一月七日秋宵刻とり雷火

三町計り焼失ふ八ヶ所脇焼失ふ

○十二月より山号光る当年とり初る　今も当年ふ号光る故

とりあり是四脚あり

寶永三年　丙戌

正月二日備前侯桜の雲輔率　名帝舜号雲海称小左衛
領源の称号を賜ふ

○正月十七日歌舞伎田宮田町より出火して筋違見附土手町
屋敷田町三丁目より小路を
鎌町安藤町辺新大坂町新材木町をこうち焼ふさぐ翌十五日
辰刻鎮る○正月十八日回向院門前にて勧進
せし柴五十年忌開帳あり○二月廿日夜亥刻神田紺屋町
表六角水汲町二町焼亡せり
○同月十七日梨子の車武藤車　戸田氏名恭岩号車と称す清水金吾もと
蔦沢藤吉　号八郎兵衛もと
命のそそを
うつす向ひて　○同月十七日備前栗山潜車車　名應　称源助
弱冠にして卒す
○六月元字今改晋あり是を宝字報とい

○七月より根津権現社内門前の町屋
いづれの坂の訴ふあり○七月廿二日大雲起る
○八月狩野松栄惟信法眼没　法名松栄斎
○九月十五日亥下刻大地震○十一月九日医師藪孝庵率　名慶之
の父と二田　号松斎
○十一月十六日巳刻に谷中町より出火　屋敷数百戸を焼　焼死者
○同月廿日夜子刻和泉町より出火大坂町役者町表左衛門町堺
町葺屋町木挽芝居数町長谷川町はもと武家方ゟ町屋二町長十
五町計り焼亡

同巳年　丁亥

正月参議川端地蔵堂松大僧正再建　名良海

施餓の事あり○正月十五日申中刻浜町新泉町より出火本所一の
橋弁才天下まで焼る中の橋葉草天神の社迄元小柳町に及ふ宮下類焼
○二月晦日俳人榎本其角卒 四十七才 号宝晋斎 二本榎上行寺に葬る
○三月八日大火あり旧正保録に記せり 委細未詳 ○俳家朝顔笠山盧卒
荒井回向院にて寂○五月廿二日東叡山勧学院了翁僧都寂
○七月二日下谷霊梅寺住持採誉法師寂 立信の目ハ吉田余とりし 甲斐流筆学の名有し人也
○八月朔日小石川立慶橋辺より出火駿河町茅二手町経靱焼る
○九月四日熊谷安左衛門卒 浅草本法寺に墓あり碑の文に実相寺如月八日夜の闇をてらさんと もろくとも浮世の空の果もなし 墨やふれ 月八日夜 一中日頼
○九月廿七日儒師松浦霞沼卒 六十四才名默字禎卿 日暮里本行寺葬
○十月十三日俳人服部嵐雪卒 五十四才号雪中庵常楽寺に葬 辞世の句 一葉散る咄ひとつちる風の上
○十一月十六日連歌師里村昌陸卒 六十九才

○諸国銀札停止あり
○十一月廿日より富士山の根より須走り口焼る天暗く雷声地震
夥しく宝永山より灰降りて雪の如く地を埋む西南頻りに鳴ひびきあり
白昼暗夜のごとく燈燭挑灯をともせし廿二日殊にはげしく
廿四日の暮より天晴れ皎日を弥して諸人安堵す又廿五日廿六日
再び天曇り砂降り雷声のひびき震動地震あり是より黒灰降
廿八日平常のごとし此時富士の山を宝永山といふ世人此頃噴嘆
を恐る 此年折焼ハ宝永元より富士山焼る例ハ延暦十九年三月廿四日より四月十八日迄今年のごとく焼貞観元年五月十日白焼るといふ
○十二月廿八日清人王寧宇卒 三田小山大聖寺に葬

宝永五年　戊子　正月望

正月元日大雨○同正月三日武蔵相模三河甲にて砂降

○三月地上に白毛を生ず○三月秋元家臣岩田彦助といふ人武蔵入間郡有馬村堀兼井の旧蹟久しく廃せるを歎き石碑を建つ○四月朔日茶人山田宗徧卒（八十五才 名周学 東本願寺地中長徳寺に葬す男子二人有山田久兵衛宗屋と号す後宗也とも云）○四月郷人芳賀一晶卒（一に云宝永二年とも云）

○五月十文銭をもちて通用始る（表に宝永通宝裏の縁に永久世用とあり経一寸二分重一匁文字は小田原侯の臣にて林東溟の門人樋口孫四郎書之）○深川の海門（世に地蔵坊といふ）正元金銅丈六の地蔵尊六躰を造立せり（今年より始めて江戸六所に安ず南品川品川寺 今年九月成 山谷東禅寺 宝永七寅八月成 四谷太宗寺 正徳二辰九月成 巣鴨真性寺 正徳四午九月成 深川霊巌寺 享保二酉四月成 同所永代寺 享保五子七月成）○是より麻疹流行

○十月廿四日算術の師関新助孝和卒（号自由亭 関流祖也 牛込浄輪寺に葬）

○雑子ヶ谷本地仏観世音開帳

○十一月十五日深川八幡宮造営遷宮○十二月二日狩野随川岑信卒す（四十七才）○十二月廿二日後藤十代廉乗卒（八十二才）

○十二月谷中感応寺（今の天王寺）の議ある寛無乃居室に尚歯会あり渡辺幸庵百廿七才にて上座あり狩子によるゆゑある派の僧二人医家人素襖襟にて着座す（長生殿表春秋家了愛門安日月蓮洪待を来て座の乃に掛おかり是上席の者の古実あるらし幸庵八年宝挿羽生駿河之大正十年壬午年に生る仕官の次八十を越の勤功ありて後退隠して居士となり天竺阿蘭陀を始め諸国を廻り九十九才の時浪朝し宝永八年卒す 同に云幸庵老人の説に人八十年老て米の字よりと云く子猶更に上方に八十才まで出ずるも八十の人と書て米ありといへり）

宝永六年　己丑

正月十文銭通用止○去年十月廿日の頃より雨降らず正月十一日夜に至りて雨降る（折柄甚かりけり）○三月濁酒運上御免

○四月三日より七月二日まで深川八幡宮開帳

○六月宝字銀通用ちまる

○七月ころ九月まで回向院ほそ浴室(ゆやかん)を設(もうけ)ける

○九月多賀朝湖(たがちょうこ)俳句をもてさる浚(さらえ)英一蝶(えいいっちょう)と号(ごう)す　深川長慶町(ふかがわちょうけいちょう)千代もと

○十二月廿日俳人小澤婦人(おざわふじん)卒(そつ)　本銀町(ほんしろがねちょう)坊正(ぼうせい)なり　俳名(はいめい)琴(きん)琴女(きんじょ)

○浚辺葉窓(さらえへきそう)対話記(たいわき)成　杉本義陳(すぎもとよしのぶ)編写(へんしゃ)本

宝永七年　庚寅　八月図

二月上野清水(うえのきよみず)稚松(わかまつ)の社(やしろ)華表(とりい)の形(かた)を移(うつ)す

○三月二ツ銀(ぎん)通用(つうよう)改(あらた)○高藤大和守(たかとうやまとのかみ)石垣(いしがき)を築(きづ)せらるる

札(さつ)切定(きりさだ)る○湯女(ゆな)の風俗(ふうぞく)寺社(じしゃ)剣術(けんじゅつ)岡山本食(おかやまほんじき)等(とう)の上人(じょうにん)多(おお)し　享保三戊(きょうほさんつちのえ)六月七日

辻化(つじばけ)九十五才(くじゅうごさい)ありう○寺田向院(てらだこういん)ほそ移(うつ)る　名(な)共(とも)乗(のり)物(もの)ほ許(ゆる)さる

○三月十九日角田川(すみだがわ)水(みず)ほ増(ま)す橋(はし)ほ九七百世(きゅうしちひゃくせ)二年(にねん)ほ大会佛(だいえぶつ)回向(えこう)

捌(さば)ふ汲(くみ)紀(き)ほ深(ふか)る夏(なつ)ほ元年(がんねん)ほ六(む)ほ七百世(しちひゃくせ)ほ年(ねん)ふあ(あ)ほ五(ご)ほ

○二月ころ五月(ごがつ)ほ初(はじ)まりて永代(えいたい)ほ行(おこな)ひて炎(えん)ほ

災(わざわい)ほ絶(たえ)ふ○江戸(えど)ほ図(ず)ほ

○七月十一日夜深(よふか)る剣(つるぎ)玄(げん)の杉雲(すぎぐも)観音(かんのん)

○七月ころ八月まで市谷八幡(いちがやはちまん)文(ぶん)境門(さかいもん)ほ於(おい)ふ深川(ふかがわ)法輪寺(ほうりんじ)虚

空蔵(こくうぞう)寮(りょう)○九月廿一日ほ品川(しながわ)海晏寺(かいあんじ)ほ始(はじ)めて法人(ほうじん)供養(くよう)ほ

日(ひ)ほ於(おい)ふ一丁目(いっちょうめ)ころ二丁目(にちょうめ)まで廿(にじゅう)ほ日(ひ)ほ於(おい)ふ二丁目(にちょうめ)ころ三丁目(さんちょうめ)ほ

○十月十日夜刻(よるのとき)沈(しず)ほ事(こと)ほ門(もん)ほ焼(やけ)ほ亡(ほろ)ほ　一本(いっぽん)ほ十二月(じゅうにがつ)

○十一月琉球人来聘(りゅうきゅうじんらいへい)　正使(せいし)吳差敦(ごさどん)　副使(ふくし)孫廣通(そんこうつう)　名見城(なみしろ)里子(さとこ)

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62
ガラス使用

大火ありしとぞ○十一月青山梅窓院の鳶鐘を鋳改めんとせしが仮持法蓮社求めの芸鏡的上人の愛子於万女事り承諾ありて佛果を得さしめ度て一面の鏡を捧げ来りより那くの色を加へて鐘を鋳かくに解脱を祈るの因縁もあるべしと云ふ公家覚て後例ふつ面の鏡あり上人享保の比をなしこの鐘のごとくの鐘を鋳改しむとぞ

○十二月十九日未下刻神田小柳町つぎ真田家出火類焼凡そ一二丁町八丁堀霊巌寄海を西の長二十五町幅二丁町より七八町ほど東の弾正橋に至る迄七面大明神辺諸菊しつる女山西の方より後金の店ありしとぞ

○翌年七面坂七面大明神勧請

壮年間記事

寛永中霊夢ありとて両国米沢侯の門内より一石像の閻魔王江戸金龍院境内に移せり

○寛永中疫病流行しに弥辺の百姓共小さき子の麦芽糸の如きを煎じ用ひしに病忽ち治せりの方伝ありしより世俗代辺辺の童子に授薬を乞ひて用ひることそ○塵塚谷小藍摩芋の本日本へ寛永年中来るとぞ

あり蒲焼ともよく味噌汁ともよし味ひ薯蕷に似たり

井年乙卯小石川牛天神の脇より出火数百軒を焼く

（この年号誤謬甚だ多し考をあらためよ）

○寛永中安藤帯刀公実法公等六本木辺の脇屋敷を賜ふ

都て何と某の初めて人の不具者の霊の祟りを

839
8
62

○寛永元年板遠近乃至の江戸図ふぜんの有様この前例矢の由緒深町屋と家屋敷を並べ　毘沙門天満宮その方ふ隅りてあり

武江年表巻之二畢

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『武江年表 8巻』 請求記号 839-62

ガラス使用